

随 想

七十にしてなお樹を植う

八 木 三 男

三年まえのことだ。あと三月もすれば七十歳になるうといううらかな春の日に、知人の厚意によって足利市から「楷」の苗木一株がわが庭にもたらされた(拙著『予後の風色』)。「楷」とは中国原産トネリコバハゼノキ、孔子廟を取り巻くいわゆる「孔林」として孔子の弟子の子貢が二五〇〇年もまえに植えたものである。わが家の楷はその「孔林」の楷の子孫の種子から足利市が育苗したものだ。文字通りの貴種で、学問の樹として珍重されている。

楷は秋の紅葉が非常に美しいというが、最終的には二、三メートルにもなる喬木である。わたくしはそんなのが大樹になつて二株、わが家の小さな庭に享々と聳えたらどうなるのだらう、とふと思つたが、二、三〇年先のことはどうでもいい。「わが亡き後に洪水は来たれ」というくらいのものである。

最近、同年輩の教員退職者が、これからの庭の植樹は成木がよく、苗木では楽しむのに時間がかかりすぎて間に合わない、といつていた。その説には当然一理あるが、しかし、苗木でも堆肥をたっぷりやつて整えた土に根が活着さえすれば、意外に成長が早く、花や実も充分楽しめるし、何よりも年々の成長とその変化

を見られるのがうれしい。これはわたくしが経験的に知っていることだ。

蔬菜を作っていたわが家のキッチンガーデンは労働力の問題等で一部は花壇に、ところどころに楷の木を含めて主として花も実もなる苗木を植えたところ、成長が早く、一〇年後には森のようになるだろうと予測している。

*

*

*

話が変わるが、昨年「日本人の食事とその様式」という小文を書いて、その末尾で詩人袁枚（八世紀）の『随園食單』に言及したことがあった。そのついでにわたくしはアーサー・ウェイリーの『袁枚——十八世紀中国の詩人』（加島祥造他訳、東洋文庫・平凡社、一九九九年）を読んできた。

アーサー・ウェイリーとは『源氏物語』を英訳して世界に紹介した高名なあの碩学である。彼によつて『源氏物語』（The Tale of Genji）は世界の古典になった。ウェイリーは日本語や中国語をイギリスにいたまま独習し、その古典語も現代語も身につけた。そして『論語』や『西遊記』などを紹介した。

『袁枚』はウェイリーの詩人・文人・学者的資質が総

合的に遺憾なく發揮された労作である。袁枚の詩はイギリス風のいわば現代の自由詩として、彼の詩魂によつて訳出されている。

余談になるが、わたくしは英訳された『源氏物語』を読んでいないが、敗戦間もない少年のころ、ウェイリーの話を聞いたことがある。日本の大学では英文学の先生でも英語を話せない人がいるといつて批判されたとき、誰かがウェイリーだつて日本語を自由に話せないといつていた。事実かどうかは知らないが、なぜかなんとなくほつとした記憶がある。

本題にもどろう。ウェイリーの『袁枚』を読み進むうちに次のような詩に行き当たった。

七十 猶お樹を栽う
傍人 癡を笑う莫かれ

古来 死有りと雖も

好在 先知せず

「大意」七十歳にもなつて樹を植えたりすれば、人はバカだといつて笑うだろうが、昔から、必ず死ぬといつても、幸いなことに（好在）いつ死ぬかは分からない。

ウェイリー訳は自由詩だが、わたくしの好みにしたがつて、伝統的な読み下し詩形にした。

十八世紀といえは、「七十歳」古希（古来希なり）は実体的な意味をもち、今なら九十歳代もそこそこだろう。それを衰枚は実に八二歳の天寿を全うした。その間、南京城西の大邸宅「随園」に拠つて、多くの美女たちに囲まれ、豪奢にして自由闊達な詩文とグルマンの世界に生きた。その原資は売文だといわれる。

* * *

いまだきは、七十歳で樹を植えたとしても、一〇年もすれば大きくなつて、花も実もつけるだろうとわたくしには思える。桃栗三年柿八年である。実際、四年前に苗を植えた柿は昨年はじめて実をつけた。盆栽仕立てにしようと思う。

こうして、確実に近づきつつある自分の死について考えることはあつても、その予感はいまよりしない。かつて二十代のころ、若死にするのではないかと恐れたことがあつた。しかし、脊椎崩落の危機にさらされて重症だった敗血症のときも、頭蓋切開による脳動脈瘤のネック・クリッピング手術のときも死を考えるととはなかつた。最近発症がわかつた難病（小脳退化による運動失調）については、緩徐的に進行するといつても、治療法がないために、八十歳代になればおそらく歩く

こともしゃべることもむづかしくなり、周囲の人々によつて確実にかつ全面的に介護されることになるだろう。しかし、幸い手には現在のところ足や口のような症状がきていないから、書物も読め、パソコンで文章も書け、メールで人と交流もできるかも知れないと思つてゐる。先々の不安は無論大きい、比較的高齢になつて発症した難病を運命として受容してしまえば、それほど深刻に考えることもないのかも知れぬ。たとえば、運動の統合を司る小脳を刺激する意味で、週三、四回、一回一キロずつ水中歩行して二年七ヶ月の〇五年一月現在、すでに四〇〇キロ近くは歩いてゐるが、そのプール通いが難病の進行を抑制するのにどのくらい効果があるものかひとつの興味の対象にすることもできるだろう。

ふと思ひ出して、余談だが、四、五世紀の田園詩人陶淵明も死を運命だと考えていたことはかの衰枚と同じだが、貧窮のなかで清潔・孤高の生涯を送つた陶淵明は晩年に「挽歌の詩三首」をつくつた。挽歌とはいふまでもなく棺を挽くという意味で、自分の葬送を主題にしたものである。彼はその一首なかで、棺おけの蓋をあけて外の様子をうかがつたり、最後に「ただ恨

むらくは 世に在りし時に 酒を飲むこと 足るを得ざりしを」と嘆じた。彼の精神は言葉の平明さに比して実際は複雑・難解なのだが、彼が挽歌で自分の死を對象化した心境は現在のわたくしの心境とさほど無縁ではないように思う。

*

*

*

この歳になると係累や親しい友人の死に毎年のように会う。つれあいや係累を失った老人の孤独を見聞きする。客観的にはわたくしにとつても死は差し迫った大問題ではあるだろう。最近のように入退院を繰り返すと、現代の死の態様についても考えることになる。わたくしが敗血症で脊椎崩落の危機をようやく乗り越えたころ、同室に現に脊椎が崩落してしまった老人がはいってきた。退院してから定期診療で病院を再び訪れたとき、たまたまその老人の死を知らされた。

考えてみると、現代の死のほとんどは医療施設の完全な管理のもとで、少数の係累に見守られながら、死に行く人は痛みに苦しむこともなく、近親者は悲嘆に暮れて大声で泣き叫ぶわけでもなく、ひそやかに人知れず死を迎えるのである。そしてとくに老人の死は型通りに事務的に手際よく処理されていくように見える。

アナール派の巨匠、フィリップ・アリエスに『死を前にした人間』(成瀬駒男訳、みすず書房 一九九〇年)という大著がある。

彼は中世から現代にいたる「死」を五つの類型に分けて考察したうえで、現代の死を「倒立した死」として描いた。医療技術や衛生観念の進歩で、死は管理され隠蔽されて、もはや死にゆく者は死の主体ではなくなったというのである。

一九世紀には、すでに古い共同体から解放された家族感情のいちじるしい変化によって、両親、兄弟、恋人などの特定の人の死が強い情動を呼び起こした。シヤロット・ブロンテの『ジェーン・エア』では、ジェーンは寄宿学校で結核に冒された瀕死の同級生で親友のヘレンとしつかり抱擁し合いながら寝入り、ヘレンはそのまま息絶えてしまう。深い情愛によって死は美化される。アリエスは一九世紀の死を「汝の死」と名づけた。同じように、たとえば一九世紀初頭のドイツの作家ホフマンの『短編集』(池内紀編訳、岩波文庫)では、収録された六編の結末はすべて死や死の暗示であり、病死にしろ自殺、事故死にしろ哀惜の念の深いロマンティシズムの香り高い美しさだ。

現代の死は様相を一変させる。一九世紀に砒素を飲んで自殺を図ったフロベールの「ボヴァリー夫人」が末期に発したような「ものすごい悲鳴」はもはやなく、鎮静剤は瀕死者をおとなしくし、モルヒネは意識を朦朧とさせると同時に激しい発作をおさえる。死はもっぱら苦しみの和らいだ生者が、要するに苦悶のない生物学上の移り行きの観念によつて、控えめにしかしし製品を保つて、社会においとまする出口になった。

医療技術と制度の進歩、家族の善意とが重なつて、瀕死者の苦悶に満ちた姿は回避され、しかし重苦しい沈黙だけが死のうえに広がった。こうして死が完全に医療化された結果、一切の感情が放逐されてしかるべき、チューブが林立する病室のなかで、十九世紀には一般的であつた臨終の時の心の交感から、率直さと悲壮感が失われてしまった。死者はもはや死の主体ではなくなつた。死は倒立したのである。

こうして、現代のヨーロッパ世界が伝統的な宗教観や死の儀式などで日本と大きな隔たりがあるにもかかわらず、日本の現代の死に、その心性においてきわめて近似してきていることにあらためて驚くのである。

たとえば、フランスにおける盛大な葬儀を筆頭とす

る喪の衰退である。火葬は土葬（埋葬）に比して完全かつ決定的に清算するという印象をもつにもかかわらず、埋葬に対して人々は圧倒的に火葬を選ぶ。そして火葬に付した者の家族は一般に墓碑を建てない。ラディカルなものは灰を撒き散らす。そこにはかつての墓崇拜や墓地崇拜はなく、地獄は完全に消滅し、悪魔の存在を信ずるものでも、その活動を現世に限り、劫罰はもはや信じていない。

そして、葬儀のあとに服喪がくるが「哀惜のつらさは、あとに残つた者の奥深い心の中で存続するだろうが、今日のすべての西欧諸国では、遺族はおおやけの席では決して悲嘆を露わにしてはならないのがきまりなの」である。これは以前の人々が遺族に要求したことの、まさに逆である。

こういった服喪と死の心性の動向を前提にして、日本でも、多くの人々が生前において本人の死後の服喪の形式をもつばらその個人の考えによつて予定するようになつた。すなわち、葬儀を行わず、密葬にする、香料などは廃止、墓を作らない、など。医学の進歩と相俟つて、共同体が失われ、分散した個人の広大な集合がそれにとつてかわつたからである。そこには静謐

な死と服喪があるだけだ。

* * *

以上のようにアリエスは二十世紀の死を死者が死の主体ではなくなった「倒立した死」として描いたが、二十世紀から二十一世紀の現在も重要な問題としてあるのは、いわば「強制された死」、いうまでもなく最も典型的には戦争による死であるが、ほかに政治的、思想的、民族的差別と弾圧による死がある。さらに、絶え間ない内戦や極端な政治的抑圧によってもたらされる、たとえば地域的にはサワラ以南のアフリカの人々の政治的、経済的貧困による死である。アリエスはこれらの問題を現代の死の問題としては取りあげなかった。

その死は「倒立した死」とはまったく違う意味で死者が死の主体ではなく、ジャングルや砂漠に無残にうち捨てられ、死の態様はほとんどが侵略者や権力によって隠蔽された。

しかし、ここでそれらの問題を取りあげる用意も覚悟もない。

* * *

それにしても、〇四年は大規模な自然災害や政治災害が相次いだ。国内では石原都政の教育テロリズムや

憲法や教基法の改訂の動きの具体化などのほかに、中越大地震やインド洋津波大災害があり、人間の尊厳を傷つけたり、「平和と自由」の日本の国家理念を著しく荒廃させる野望が日程にのぼり、イラク戦争のほかに想像を超える悲慘が地球を覆った。ごく身近な話では、最近、老年者控除の廃止で、年間六、七万円の増税の通知がわが家に届いた。

政治や自然がそんな具合だったからだろう、わが家の「臘梅」が十二月中に狂ったよう一面に開花した。臘梅は光沢のある黄色い花が蠟細工のような風合いをもつために普通「蠟梅」と書くようだが、わたくしは「臘梅」のほうが好きだ。草木の名称には即物的ではない「柗助」や「都忘れ」のような方がいい。旧暦の十二月である「臘月」に咲くという意味だろう。太陽暦なら一月末から二月にかけてである。芳香を放つ。十数年まえの一月の末、鎌倉の東慶寺の玄関先でその満開を見たことがある。雪国では通常二月の雪のなかである。数年まえのほんの高さ二〇センチほどのかぼそい苗がいまやキッチンガーデンの一角を占めて堂々と繁茂し、この冬はことのほかたくさん花をつけた。

(やぎ みつお・いがた県民教育研究所所長)